

文学としてのマンガ④

—— 時と向き合った諸作品 ——

山田 利博

Comics as Literature (Part IV) : Works that Deal with the Characters
Confronting Time

Toshihiro YAMADA

1. 問題の所在

マンガを文学として扱う試みも今回で4回目となったが、前回は、現代マンガに於ける異界表現ということで、その一形態として、下宿もの等、時の止まった作品も若干取り上げた¹⁾。しかしそれらは、単に異界性を示すのみには止まらず、他にも幾つかの問題を孕んでいる。中にはやはり、日本人の特性を示すのではないかというものもあるので、今回はそれをテーマとしたいが、一口に時の止まった作品と言っても様々なレベルのものがある。一番有名なのは、登場人物が誰一人年を取らない『サザエさん』であろうが、その理由については、1999年8月1日、日本テレビ系で放映された、『知ってるつもり?!』『「サザエさん」の秘密 漫画家長谷川町子』の回で、稿者の知る限り初めて明らかにされた。それは、核家族化が進む現在の世の中の状況と磯野家の様態が合わなくなってきたので、昭和40年代半ばで意識して時を止めたというものであったが、この理由は、自分の理想とする世界を維持するために時を止めたということで、前回扱った異界表現と、或る意味何も変わらない。それでは内容がダブることになるので、今回はそれを避けてみたいが、時の止まった作品の中には、これとは全く別に、止まった時そのものを主題としている諸作品がある。それが「時と向き合った諸作品」の謂であるが、このタイプの作品群は、作品内全体の時が停止しているわけではなく、或る特定の人物の時間のみが止まっており、それ以外の人物の時間は、むしろ激しく流れているものが多い。具体的に言えばそれは「吸血鬼もの」という作品群に顕著であるので、まずはその話から始めてみたい。

2. 「吸血鬼もの」の系譜

「吸血鬼もの」とは、その字の如く、吸血鬼を主人公としたマンガジャンルのことだが、それがいつ頃始まったものかは、実は稿者も正確には知らない。ただ、マンガ・アニメに関するどの書物を繙いても、萩尾望都の『ポーの一族』から、その様相が一変したとあるから、まずはその辺りから話を始めるのが妥当であろう。

『ポーの一族』は、1972年の1月から76年4月にかけて、小学館系の少女マンガ雑誌(複数)

に不定期連載されたオムニバス形式の作品であり、81年4月の『國文學』臨時増刊『現代マンガの手帖』にも取り上げられたほど著名なものであるから、内容の細かな紹介は或いは不要かもしれない。しかし、連載が終了してから既に20年以上が経過し、何の脈絡かは知らないが、4年ほど前に本学の女子学生に『ポーの一族』の話をした同僚も、やはり通じなかったという証言をしているから、最初に一応簡単な説明をしておこう。

この作品の主人公は、エドガーという14歳の少年で、彼にはメリーベルという、4つ違いの妹がいた。彼らは、その後何世代にも亘って関わり続けるエヴァンズ伯爵家の一族なのだが、母親が伯爵の愛人であったため、その本妻に疎まれ、母の死後、伯爵に引き取られるはずであった幼い彼ら²⁾は、本妻の策謀で、乳母に殺されようとする。しかし、結局乳母はその任を果たせず、二人を森に置き去りにするに止めたので、彼らはそこで吸血鬼（この作品の中ではバンパネラとよばれる）の老ハンナ・ポーと巡り会い、その一族と共に生活することになる。老ハンナは初め、彼らに正体を明かす気は無かつたらしいが、エドガーが11歳になった時、一族のフランツ・ポーツネル男爵が、長年思いを寄せていた人間の女性シーラを妻とするため、一族に迎え入れる儀式を見てしまったので、メリーベルには手を出さないという条件で、エドガーは吸血鬼となることを受け入れる。ただ、大人と違って子供は成長速度が速いので、子供のうちに吸血鬼にすると、ちっとも成長しないことによって周りの人間に怪しまれるから、最初の約束では10年後、すなわちエドガーが成人した時ということであったが、3年後の不幸な事故により老ハンナの正体が近隣の村人に知れてしまったため、バンパネラたちはその場所から退去せざるを得なくなり、その時目覚めた一族の長キング・ポーの命によってその約束は早められ、エドガーは14歳で時が止まることとなる。もう一つの約束、メリーベルに手を出さないことというのも、彼女に何も知らさないまま人間の伯爵の養女にやり、一族から遠ざけるという形で一応は遵守されるのだが、彼女が時の止まった兄より一つ下の13歳を迎える頃、そこで自分を棄てた継母の息子（但し伯爵の血は引いていない）と何も知らずに愛し合い、途中で事情を知った彼の方は自殺してしまうという悲劇的な恋愛事件に巻き込まれ、結局は兄と共に生きる道を選んだ。こうして幼い吸血鬼の兄妹が誕生するわけだが、100年ほど³⁾時間が経過した後、遂にメリーベルの正体も人に知られるところとなり、彼女は一塊の灰と化す。たった一人残された⁴⁾エドガーは、淋しさに耐えきれず、その頃、メリーベルのために近づいていた14歳の少年アランを仲間に加え、今度はその二人で、さらに100年ほど⁵⁾の時を渡ることになるというのが、ごく大雑把な内容である。

1996年8月21日に放映された、『BSマンガ夜話』の「ポーの一族」の回（以下、「ポーの回」と略称）でも言及されているように、エドガー、アラン、ポーといった言語遊技から始まって、当時の少女マンガに見られたお遊び的要素も多々見られるものの、1780年頃から1976年までの約200年を描くこの長編を、この程度の分量で説明し尽くすのは所詮無理な話ではあるけれども、細かい話はともかくとして、この超大作を読み終えた時、ほとんどの人の心に残るのは、ラストに近い、エドガーとアランが永遠に我々の前から姿を消す次のような場面であるらしい⁶⁾。

…帰ろう／帰ろう（…アラン！）

遠い／過去へ…（アラン…！）

もう明日へは行かない（…アラン！／アラン…／メリーベル…？）

昔／昔の／幸せ（メリーベル…／シーラ）

帰ろう／帰ろう／時を／飛んで（オズワルド）（老ハンナ／…お母さん）みんな／みんな
 ／…アハハ
 …アハハ
 みんな／みんな／…（アラン…！）…アハハ

（引用は小学館『萩尾望都作品集』9（『ポーの一族』4）1978年191頁）

引用しようとして、文字だけで引く難しさを改めて思い知ったが、（）を付したのはいわゆる吹き出し、すなわち科白の部分で、それ以外はほぼ心中思惟に相当する部分と思われる。ただ、この場合はどちらもエドガーによるものとなっているので、厳密には区分がしにくいのであるが、一応形で分けられている通りとした。／を付したのは改行されていたところで、引用文中の改行は、コマの移り変わりを表している。これだけのことを踏まえた上で、今少し内容について説明しておく、この最終話「エディス」の10年前の出来事を描く「ランプトンは語る」の回で、自分達の正体を明かさないためとはいえ、エヴァンズ家の血筋のシャーロットという少女を火事で死なせてしまったアランは、罪の意識もあって、残された妹のエディスに近づくが、彼女を自分達の仲間に加えるか否かをエドガーと議論しているうちに、エディスの家がガス漏れから火事になり、エディスはそれに巻き込まれる。当然アランはエディスを助けに向かうのだが、誤って火中に落ち、それを見たエドガーが、自らも炎に包まれながら囚われた想いが、引用部というわけである。絵を見れば一目で分かることではあるが、（）を付した人名は、実際その人々の顔が浮かび上がっており、いわゆる走馬燈をなしている。

「ポーの回」でも問題にされたように、これ以降のエドガーとアランの生死は結局不明なのだが、この作品がこれ以後書き継がれないこと及び、「走馬燈」の最後が、エドガーの母親という原点に回帰していること等から、やはり死んだと見て差し支えないのではあるまいか。だとすればこれは、死を目にしたエドガーの想いということになるが、特に下線を付した辺りから、やっと死ねるといふ、ある種の解放感のようなものを読みとることに、さほど異論はあるまいと思う。

本稿のテキストとしている『萩尾望都作品集』の『ポーの一族』では最初に位置する⁷¹「ポーの一族」（これはサブタイトルである）の回でも、父親の振りをしているポーツネル男爵と口論した時のエドガーの気持ちとして、「でも ぼくが／どんなに孤独か／あなたがたには／わかるまい」、「時が／通りすぎていく／十年たっても／おなじ朝を／迎え…」（第1巻（1977年）33頁5、6コマ目）というのが描かれているし、アランを仲間に加える時の言葉も、先ほど粗筋のところでも触れたように、「きみも／おいでよ／ひとりでは／さびしすぎる／……」（同巻124頁6コマ目）なのであるから、これがこの作品のテーマであることは明白である。平安朝の古典文学を専門とする稿者は、これを読むといつも、『狭衣物語』の冒頭、「少年の春は、惜しめども留まらぬものなりければ」（引用は岩波の日本古典文学大系による。二九頁）というのを思い出すが、これは正にその逆、「少年の春」を「留」めてしまった悲劇を描いた作品なのであり、また、だからこそ、通常忌み嫌われるはずの吸血鬼を主人公とした「吸血鬼もの」というジャンルが成立する余地が存在するのである。そしてこの、「吸血鬼に同情的である」というのは、やはり日本人の一つの心性なのではあるまいか。

と言うのは、吸血鬼は元々東ヨーロッパのものであることは著名な事実であろうが、そこに伝わる民俗を見ても、或いはブラム・ストーカー等の小説を読んでも、西洋諸国における吸血鬼とは、つい最近まで、ひたすら畏怖の対象か、全く逆に不死に対する憧れの存在のいずれか

であるように思われ、吸血鬼を哀れむなど、ほとんど見られなかったように思うからである。尤も、注3)に掲げた書物に既に指摘されているように、94年に映画化された『インタビュー・ウィズ・ヴァンパイア』等、ごく近年に於いてはその傾向も聊か崩れてきているようだが、その原作の『夜明けのヴァンパイア』がアメリカで出版されたのは、『ポーの一族』の連載が終了した1976年のことなのであり、その影響が皆無であったかどうかは疑問の余地が残る。けれど、94年の『ライオン・キング』でも問題になったように、一つの作品の影響がその作品にあるか否かは、それが明示されていない以上実質的に証明不可能であるし、本稿ではそれを行うつもりもないので、この問題にはこれ以上深入りしないが、この「吸血鬼に同情的」という傾向が、日本の作品に色濃いことだけは確かなのであり、それは独り萩尾望都に止まるものでもない。前回取り上げた高橋留美子の「人魚シリーズ」も、主人公が吸血鬼というわけではないのでその点は合致しないが、人魚の肉を食べてしまったためにやはり不老不死となった男女の姿を描き、しかもそれを悲劇として捉えている点は同じである。しかし、それは一度紹介したものであるし、完全な「吸血鬼もの」というわけでもないので、ここでは新たに『吸血姫美夕』という作品に目を向けてみることにしよう。これは、作者の一人である垣野内成美⁸⁾自身が『ポーの一族』を受け継ぐ宣言をしている⁹⁾作品ではあるが、何故日本人が吸血鬼に同情的であるかのヒントを与えてくれるものでもあるからである。しかし、その前に先ず、この作品の概要をまとめておこう。

今となってはそれほど珍しくはなくなったが、この作品は先行するマンガ原作を持たず、88年にOVA（オリジナル・ビデオ・アニメ）として始まった。89年4月に、4巻を以て完結したこのシリーズは、発表当時から非常に好評で、3か月後には注9)に掲げた最初のコミックスが出版され、翌年にはコミックと小説を1冊にまとめた『COMIC NOVEL 吸血姫美夕』が出た。さらに、92年の10月から94年10月にかけて『新 吸血姫美夕』5冊が出された後、97年10月には、遂にテレビ東京でテレビアニメ化され、それは98年3月まで続いた。それと同時に新シリーズのコミックスも発売され、99年9月現在では5冊（但し、第1巻は89年のものの再発行であるため厳密には4冊）出ているという、結構息の長い作品¹⁰⁾であり、またそれぞれのシリーズで少しずつ設定が異なるというやっかいなものでもあるのだが、本稿ではその基本と思われるOVAシリーズを中心に言及することとする。

主人公は美夕という名の吸血鬼の少女なのだが、彼女は、いにしえ、神であり、魔物でもあったという神魔の末裔で、しかも彼女の一族は、自身は人間界にありながら、他の神魔が神魔界からはぐれ出し、人間に悪さをしないように監視する、「監視者」と呼ばれる立場にあった。そのため彼女の一族は、太陽の光・聖なるものといった、吸血鬼としてのあらゆる弱点から解放され、その代わり老いて死なねばならない（つまり外見上は人間とほとんど変わりがなく、それ故に「監視者」には交代が必要）といった特殊な存在であったが、彼女はそれを13歳の時母から受け継ぐ。と言うのは、その一族は生まれた時は吸血鬼ではなく、その血が目覚めるかどうかにも人によるのだが、彼女は西洋神魔ラヴァとの接触により覚醒してしまったからである。だが、子供を愛し、自分がかつて血を吸うことによって不死を与え（すなわち、この一族に血を吸われたものだけは不死となる）、そのため夫を無気力にしまったことを後悔している母は、我が子だけには同じ道を歩ませたくないと、美夕を連れて神魔の長から逃げるのだが、運命には抗いきれず、二人は捕らえられてしまう。そして、「監視者」の不在に乗じて逃げ出したはぐれ神魔を、何百年かかろうとも捕らえるため、美夕の父と母は人質に取られ、美夕自

身の時は止められる。こうして美夕の長く苦しい戦いの日々が始まるのであるが、この作品は、その設定に古典を研究する者としてはたまらなく魅力的な点が多々ある。そもそも神魔が神であり魔物でもあるというのもその一つ¹⁾だし、OVAにおける神魔の動きを封じる美夕の方法が、そのものの名を言い当てること（すなわち言霊^{ことだま}）であるのも同様である。また、その第2巻からは、美夕のライバルとして、人形であるが故にやはり時が止まっている爛佳（後に爛火と字が変わる）という神魔が出てくるが、これなど字は一部異なっているものの、『述異記』等の漢籍にある、晋の時代、王質という木こりが、森で囲碁を打っていた童子達を見ているうちに、側に置いていた斧の柄は腐り、帰ってみると見知った人は誰もいなくなっていたという「爛柯」の故事から来ていることは明らかだ。このように、魅力的な点を数多く有するこの作品ではあるが、当面は『ポーの一族』とも共通する「いつまでも死ねない者の悲劇」に問題を絞ってみると、それが最も端的に現れるのは、この作品の場合主題歌であるから、続いてそれを紹介してみよう。

1. 哀しみあふれる眼差しに

時の流れを映す

激しく燃える想い遠ざけて

白い記憶をたどれば

※宮崎大学学術情報リポジトリ登録時に歌詞の一部を省略した

誰も知らず 誰も見えない

運命の糸

涙そっと胸に抱き ひとり……

2. 心を閉ざした その瞳

凍る指先見つめ

はかなく消える愛を追いかけて

時の世界をさまよう

※宮崎大学学術情報リポジトリ登録時に歌詞の一部を省略した

いつかきつと 見える日が来る

運命の糸

今はそっと胸に秘めて ひとり……

哀しみあふれる 眼差しに

時の流れを映す

永遠の命抱きしめる
 あてのない旅は続く
 はるか時の彼方へ……

TVアニメ化されて主題歌も変わり、新しい主題歌は「美夕八千夜」となったが、如上の点では、こちらがより鮮明かと思ひ、古い主題歌「吸血姫美夕」を敢えて選んだ。下線を付した辺りに特にそれが感じられると思うが、初めに予告しておいたように、この作品には、何故そうした感情が生じるのかという疑問を解く手掛かりも現れる。OVA第4巻「凍る刻」の冒頭から9分後の場面である。

先述の如く、妻から永遠の命を与えられた美夕の父は、絵画を殊の外愛している。彼自身の言によれば、絵は「永遠に美しさを閉じこめておける」からである。しかし、それに対して、一度ラヴァの血を吸っただけで、まだかろうじて人間であった13歳の美夕はこう答える。「そうね。でも私、動いているから海は美しいんだと思うの。いつも違うその一瞬が美しいのよ」と。そして、この言葉がこの作品のキーワードであることは、21分後にも美夕の母によって繰り返されることから明らかである。さらに母は続ける。「人も同じよ。死があるから生の素晴らしさがあるの」と。これがこの作品のテーマであり、ひいては日本に「吸血鬼もの」というジャンルを成立させる所以であると思われるが、これが日本人独自の思考であることを証明するためには、もう少し別な角度からの考察も必要であろう。それは、「吸血鬼もの」とは一見何の関係もないように見える『銀河鉄道999』との共通性である。続いてそれを見てみよう。

3. 松本零士『銀河鉄道999』

松本零士の代表作とも言えるほど有名なこの作品について、細々とした説明は今更不要なのかもしれないが、最初の連載終了から既に20年近くは経過しているから、念のため簡単にまとめておこう。

この作品は最初、少年画報社の『週刊少年キング』¹²⁾に、77年から81年にかけて連載された。非常に好評であったため、78年9月には、フジテレビ系でテレビアニメ化され、それは81年の3月まで続いた。その間映画が2本作られ、第1作の『銀河鉄道999』は79年夏、2作目の『さよなら銀河鉄道999 —— アンドロメダ終着駅 ——』は81年夏の公開であった。さらに、折しも今年1999年であるため、それに合わせて97年から新シリーズが開始され、98年春には新作映画『銀河鉄道999 Eternal Fantasy』が公開、99年9月現在では、そのコミックスは5巻目まで出ている。

次いでその内容であるが、新シリーズは現在展開中であるのでしばらくおき、旧シリーズ中心にまとめると、最初の舞台ははるかな未来の地球。人類は体の全てを機械に置き換えることに成功し、部品さえ気をつけて交換していれば、ほとんど不老不死に近い暮らしを送れるようになっていた。けれども機械の体は高いので、そうした優雅な生活を送れるのは一部の富める者達のみで、貧しい者達は相変わらずと言うか、むしろ貧富の差は広がりつつあった。しかし、そんな者達にも一つの希望があり、それは、メガロポリス東京ステーションから出る銀河超特急（その頃宇宙旅行は既に宇宙列車に乗れば出来るようになっていた）999号に乗れば、いつか機械の体をタダでくれる星に行くことが出来るというものであった。尤も、999の運賃自体も非常に高い¹³⁾ので、所詮は叶わぬ夢なのだが、主人公の星野鉄郎という10歳¹⁴⁾の少年は、機

械伯爵の人間狩りによって母を殺され、その遺言に従ってステーションに向かう途中、母そっくりの女性メーテルと出会い、旅の間中彼女を守る（だが実際は彼女に守られる方が多いのだが）という条件で、999のバスを貰うのである。こうして現在も続く鉄郎とメーテルの長い旅は始まるのだが、この作品の一つのポイントは、やはりメーテルの正体であろう。

実はそれは、現在でも良く分からないのだが、少なくとも第1作の映画では、機械の体をタダでくれる星・機械化母星の女王プロメシュームの一人娘で、機械の体になる代わりに美しい人間の体に次々と乗り移ることによって命を繋いでおり、現在は鉄郎の母の体であるためにそっくり（と言うか、本人なのであるが）なのであるという正体が語られてはいる。しかしこれは、鉄郎の母の死から鉄郎とメーテルの出会いまでに5年のブランクがある映画のみに許される設定で、母の死の直後に会おう原作やテレビアニメの場合はちょっと考えにくい上に、その映画でも決定的な矛盾を犯している。と言うのは、原作・テレビアニメ同様、映画の中でも、機械伯爵に剥製にされた母の姿を、機械伯爵の城で鉄郎が目撃しているからで、するとその時のメーテルの体はいったい誰のものなのだとということになる。したがって彼女の正体は、映画・原作の旧シリーズ・テレビアニメの最後に共通して語られる、「私は あなたの／想い出の中に／だけいる女／……………」 「私は…／あなたの／少年の日の／心の中にいた／青春の幻影…」 (少年画報社ヒットコミックス『銀河鉄道999』（以下この作品の引用はこれによる）第18巻(81年12月) 207頁5コマ目) という方が、この作品は言うまでもなく宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』に想を得ており、そこでは彼女はカンパネルラに当たるらしいということからも確からしいが、いずれにせよ彼女は、吸血鬼ではないけれども、やはり永遠の命を有していることにはなる。けれど、この作品を知っている者には自明の理であるように、いつも彼女には翳りがあるし、着ているものと言えば、水着まで含めて黒い服ばかりである。この黒い服には実は謂われがあって、原作では第13巻(80年7月)の36頁4コマ目に、例の巻紙のナレーションとして、「メーテルの黒い服は／死に別れて来た／多くの若者への／永遠の喪に服して／いるからだ／鉄郎は思った…… (以下略)」と語られている。ここでは鉄郎の推測という形ではあるが、多分これは当たりなのであって、つまりはメーテルも、その永遠の命を享楽していないことになる。そしてこの作品にはその理由らしきものも語られているのであって、それは第16巻(81年5月)第一話「震動駅」の最後(36頁1コマ目)の、同じく巻紙のナレーションにある。

機械の体になって／永遠の命を手にする／ば 宇宙の広さも／気にならない……／永遠に
生きられる者／には無限大も征服で／きるのだろう…その／かわり楽しみだけで／なく苦
しみも永遠に／続くことになる／永遠の地獄に落ちて／永遠にもがく場合も／ある……

この震動駅は機械人間の流刑地であるので、こうした鉄郎の感想も生まれたのではあるけれども、これはここのみには止まるものではなく、永遠の命を有する者全体に当てはまるものらしい。と言うのは、この作品の旧シリーズは、永遠の命を求めて旅に出たはずの鉄郎が、途中で機械人間の様々な醜い姿を見ることにより、結局限りある命を選び取るところで終わっているからである。その時の鉄郎の科白は次のようなものである。

だけど ひとつ／だけはわかったよ／限りある命だから／人は一生という時間／の中で精
いっぱい／がんばる……／短い時間の中で／何かをやりとげ／ようとする…／そうだから
／おたがいがい／思いやりや／やさしさが／うまれるん／だって…¹⁵⁾

(第18巻178頁7コマ目)

この言葉が、前節で紹介した『吸血姫美夕』のそれと同質のものであることは、恐らく誰し

も納得していただけると思うが、つまりはこの二つから導けることは、「吸血鬼もの」であろうとなかろうと、現代マンガが永遠の命というテーマを扱おうと、どうしてもその否定になってしまうということなのである¹⁶⁾。我々日本人にとっては、この結論は一見何でもないことのように思えるかもしれないが、既に吸血鬼伝説のところでも軽く触れたように、世界的に見るとこれは、聊か変わっているのではあるまいか。何故なら、キリスト教にしる仏教にしる、天国乃至は極楽というのは、神または仏によって約束された永遠の地であるはずだからであり、そこに住むことを許された者達は、いわば永遠の命を有する者達ということになるはずで、信者達は皆それに憧れているはずだからである¹⁷⁾。然るに我々日本人はそれに余り憧れないばかりかむしろ否定したりする。これは別に現代日本人が無宗教だからではなく、日本人とはもともとそうした心性を有するものだからではないかと思われる。と言うのは、こうした志向は実はずいぶん古くまで遡れるからである。それは何と、日本最初の物語文学である『竹取物語』までである。

4. まとめ

『竹取物語』がかぐや姫の話だぐらいは、誰しも知っていることであろうが、たとえ原文ではなくとも、その詳細な筋まで知っている人は、昔話の本がほとんど書店からなくなってしまった現在では、どの位いるか甚だ心許ない。しかし、かぐや姫が月に帰る直前、帰りたくない泣くという話は、まだかろうじて知っている人の方が多かろう。月は当時は不老不死の世界なのであるから、そこに帰りたくないということは、すなわち不老不死の否定に他ならない。しかも、いよいよ姫が帰る時には、自分のことをいつまでも覚えていてほしいと、姫は、竹取の翁と媪、それに帝に不死の薬を与えるのであるが、その三人は、姫のいない世の中にいつまでも生きていても仕方がないと言って、その薬を富士山で焼いてしまう。つまり、徹頭徹尾不死を否定するのが『竹取物語』という作品なのであって、それが日本で最初に作られた物語（小説）であるというのは如何にも面白い事実であろう。

そういう意味では、『銀河鉄道999』の後を受けて、それと全く同じテーマを扱う松本零士のマンガ『1000年女王』（80年1月28日から83年5月11日まで「サンケイ新聞」朝刊に連載）のサブタイトルが、「新竹取物語」となっているのは興味深い。たとえ意識しているにせよしていないにせよ、このテーマは日本では古代から綿々として受け継がれており、まただからこそこの手の作品は皆かなりの人気と共に受容されると思われるのである。

注

- 1) 拙稿「文学としてのマンガ③ ——現代マンガにおける異界について ——」（『宮崎大学教育文化学部紀要』人文科学 第1号 1999・9）。
- 2) この時の二人の年齢は、どちらもはっきりとは書かれていないが、少なくともメリーベルの方は、おくるみに包まれている。
- 3) 名作少女マンガ研究会『「ポーの一族」の秘密』（データハウス 1996）の計算に依れば、正確には122年。
- 4) この頃エドガーとメリーベルは、フランツ・ポーツネル男爵とシーラ夫妻と疑似家族を構成していたが、彼らもまたこの時の事件で灰と化した。
- 5) 注3)の書物に依れば、正確には97年。

- 6) 例えば、『現代マンガの手帖』で「ポーの一族」の項を担当された村上知彦氏もやはりその場面を取り上げておられる。
- 7) 『ポーの一族』のコミックスは、1999年9月現在、3種類出されているが、そのいずれも話の順序が異なっているので、こうした限定が必要なのである。個々の話の発表年月から推測するに、最初は発表順に並べていた（コミックスの発売形態からしてこの方が自然）ものが、徐々に内容順に整理されていったからではあるまいか。因みに『萩尾望都作品集』の順序が、一応の完成形かと思われるので、本稿のテキストとしてしているところもある。
- 8) 現在もそうだが、この作品は、垣野内の夫である平野俊弘（現在は俊貴と改名）が原案を作り（OVAではこれに脚本家の会川昇も加わったらしい）、それをもとに垣野内が描いているのでこういう書き方にした。但し、代表は垣野内ということであるらしい。
- 9) 『吸血姫美夕』（秋田書店（以下、美夕関連の本は全て秋田書店から出ている）89年7月）のあとがき。
- 10) 基本的にはこれとは別だが、美夕によって吸血鬼となった14歳の少女・夕維を主人公とし、時々には互いの作品に互いに顔を出し合う『吸血姫夕維』という作品（全5巻・秋田書店 90年9月から96年1月）も垣野内（この作品には平野の名は出てこない）にはある。
- 11) 日本の妖怪とは、本来こういう存在であることは、鬼を例にとっても分かるであろう。
- 12) 現在の『KING』とは別物。『999』の連載終了後しばらくして『キング』はつぶれ、再刊されたのが『KING』なのである。それ故新シリーズは小学館の『ビッグゴールド』で開始されたのだが、それもつぶれてしまったので、現在はインターネットにて継続中である。
- 13) 単位は分からないが、一本目の映画に出てくる999の切符自動販売機によると、その料金は約2億4千5百万と読める。
- 14) 第1作の映画では、母と死に別れた時は10歳だが、999に乗る時はその5年後という設定であった。しかし、原作及びテレビアニメでは、すぐ乗ることになっているので、この年齢と判断した。
- 15) 鉄郎はさらに、「父さんや母さんの／血がぼくの体には／流れている……／ぼくの血だって／ぼくの未来の／子供に受けつがれて／そのまた子供へと／ずっと続いてゆく…／それも永遠の命／だってね!!」と続け（同頁8コマ目）、それはそれで興味深い考え方だとは思うのだが、今回のテーマとは聊か位相が異なると思われるので、深入りはしない。
- 16) どうも完結していないらしいので、本稿には上手く取り込めなかったが、手塚治虫の『火の鳥』（1954～）にもそういう節はある。
- 17) 周知のように、悪魔または吸血鬼というのはキリスト教の反措定であり、人々が吸血鬼の不死性を極端に恐れたり、また憧れたりするのは多分これ故だと睨んでいる。

（補注）聊かテーマがずれるおそれがあるため詳しくは論じないが、今回取り上げた作品の主人公が皆14歳前後（『銀河鉄道999』の鉄郎も、映画版では15歳となる）であるのも、或いは深い意味を持つ可能性がある。と言うのは、3年ほど前に大ヒットし、社会現象ともなったアニメ『新世紀エヴァンゲリオン』のパイロットも、14歳でないといけないという設定であったからである。或いはこの手掛かりになるかと思われる、古典における14歳の特殊性を指摘する論（植木朝子「十四歳をうたう歌謡——『宗安小歌集』の二首をめぐって——」）も、つい最近（99年9月）、『日本文学』に掲載されたが、論として他に類例を見ないので後考を待ちたい。

（1999年9月30日 受理）